

エネルギー政策に関する意見箱

| | |
|--------------|--|
| 1. 氏名 | 石井正則 |
| 2. 年齢 | 70代 |
| 3. 性別 | 男 |
| 4. 連絡先 | 略 |
| 5. 御意見及びその理由 | <p>意見 具体性を欠くエネルギー転換へのイニシアティブ —2050年は近未来、具体的実施事項のマイルストーンが必要—</p> <p>理由</p> <p>エネルギー情勢懇談会提言「エネルギー転換へのイニシアティブ」(H30年4月10日)では、エネルギー政策を定めるにあたって、世界と我が国のエネルギー事情を広範囲に俯瞰して考察しておられます。これが22世紀に向けた我が国のエネルギー文明のありかたとアプローチの手法を示すものであれば、すぐれた理念だと評価できます。</p> <p>しかしながら2050年は近未来です。理念を並べるだけでは政策とは言えません。挑戦すべきことを絞りこんで、マイルストーンを定め着実に進めないと、幻想に終わりがねません。</p> <p>以下に再エネ・貯蔵システム、原子力系、水素・合成ガス化系システムに関し、課題を提示します。</p> <p>(1) 脱炭素化エネルギーシステムは21世紀全体を通して通用する理念になることは理解できます。とりわけ再エネ(太陽光や風力など変動・不安定要素の多いもの)を、補完システムを含め再エネ・貯蔵システムとして評価する手法は合理的です。FITもシステムに組み込むことにより、本当の意味での技術競争にさらされ、有為な発展の期待もできるものと推察します。</p> <p>(2) 問題は貯蔵系です。変動再エネが主力電源となるには、全量貯蔵による発電不能時の補完が必要です。2050年にそれが可能になるのでしょうか。大規模貯蔵は現状では見通しが暗いと思います。22世紀をにらんだオプションとしてならともかく、2050年に全幅の信頼を置くわけには行きません。</p> <p>(3) 既存の脱炭素電源である原子力は依存度を低減するとしています。そうすると再エネ・貯蔵システムでカバーできない分は結局化石燃料でカバーするしかありません。褐炭CCSからの水素、メタンガスも2050年にはまだ期待出ないでしょう。これらの見通しが立たない限り原子力の依存度低減はすべきではありません。むしろ増加する必要すらあります。これらのことから運転期間を終了する発電所の代替新增設が必要になることも政策に盛り込む必要があります。</p> <p>(4) 脱炭素化となる従来の化石燃料はクリーン化が必要になります。CCS処理褐炭からの水素、メタン製造だけで、化石燃料依存から脱却できるのでしょうか。日本から石油、天然ガスが消えても、世界は当分化石燃料に依存するで</p> |

しょう。この分野で日本が世界のイニシアティブをとるという姿勢は大事ですが、マイルストーンを決めて必要な開発、実証を着実に進めることを期待します。

- (5) エネルギー供給は一朝一夕にできません。開発、建設、地元理解、関係機関の承認（洋上風力なら漁業権や洋上交通問題なども）に時間がかかります。
- (6) 2050年に向けた政策であれば、理念の域を脱し、時間軸を定めた実行可能なレベルにすることを期待します。